

哲学における「人生の意味」

—我々はどのようにして人生に意味を見出せるのか—

幸田航騎（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：人生の無意味さ、Wolf-Metz パラダイム、現象学的人間観、物語、アイロニー

はじめに

人生の意味を問う場面はどんな時だろうか。夢や目標が途絶えた時、客観視して人生を振り返る時、健康上の問題によって死を意識する時など、様々考えられる。「人生に意味はあるのか」という問いは、人間であれば一度は直面する問いであり、多くの人が答えを求めている。このことは、この問いが人間の根本的なあり方に由来していることを示唆している。そこで本稿は、哲学者たちの議論に依拠しながら、我々がなぜ「人生の意味」という問いに直面せざるをえないのか、また、どのようにして我々は人生に意味を見出すことができるのかを明らかにすることを目的とする。

第1章 問いの構造

トマス・ネーゲルは、人生の意味を問う原因を、主観的視点と客観的視点という人間が持つ二つの視点の並列に求める。主観的視点とは、日常生活の中核をなす視点である。この視点によって、人生に真剣に参加することとなる。これに対し、人生を一步退いて眺める客観的視点がある。これにより、人生の中で目指しているものへの追求がいかにか偶然であるかがはっきりし、疑念を持つことをやめられなくなる。

人生の意味を問う原因は、客観的視点に立って自分の人生に疑念を持つことをやめられなくなる一方で、その疑念を黙殺し、主観的視点に立ち、真剣に人生に取り組まざるを得ないという、二つの視点の食い違いにある。人間であれば持っている二つの視点が原因である以上、人生の意味を問うことは避けられない。この問いは個人的なものでなく、普遍的なものであると言えるだろう。

第2章 Wolf-Metz パラダイムにおける人生の意味

スーザン・ウルフは、人生の意味を、哲学の長い歴史の中で重視されてきたようなwell-beingや道徳と並ぶ第三の価値として重んじられるべきものとして考える。そして、自身の人生における活動の主観的満足と客観的価値が適切に連動している状態において、その価値が実現されるとしている。

他方で、サディアス・メッツは、人生の意味は真善美といった価値と強い関連性を持つと主張する。彼は、意味ある人

生の典型例として、ピカソやアインシュタインらの人生の有意性を成り立たせている要因を分析し、「根本性理論（基盤主義理論）」を導き出す。これは、人間存在の諸条件である真善美へと関われば関わろうとするほど、その人生は有意性になるとするというものである。

Wolf-Metz パラダイムにおける議論は、人々が人生に意味を見出す際の指針となりうる。一方で、議論に賛同できない人や、同じ評価軸を持たない人を排除してしまうおそれもある。一般性の高い理論を目指せば、多くの人の譲れない価値観を無視することにもなりかねない。有意な人生を規定するような理論を提示するやり方では、誰もが人生に意味を見出すことはできないだろう。

第3章 人生の意味と現象学的人間観

パトリシア・ベナー/ジュディス・ルーベルは、その現象学的人間観において、人間にとって根本的な3つの特徴を挙げており、これらは人生の意味と密接に関わっている。

まず「背景の意味」である。背景の意味に基づいて、我々はさまざまなものを捉え、理解しており、これらは生活を円滑に営む土台となっている。人生の意味もこの背景の意味に基づいて見出されると考えられる。

次に取り上げるのは「気遣い」である。我々は、気遣う能力によって、常に何らかの出来事や計画、物事を大事に思うことができる。気遣いを通じて、非常に重要な事柄や全くどうでもいい事柄が区別された世界が樹立される。人生の意味は、「気遣い」の対象を中心にして見出されると考えられる。

最後に取り上げるのは、「時間性」である。人は、過去から影響を受け、過去の経験を自分なりに解釈しながら今を生きており、過去と現在の結びつきをもとに、何かが未来の可能性として我々の前に現れる。どのような未来を先取るか、過去をどのように捉えているかによって、自身の生き方の意味は変わってくる。時間性も人生の意味を支える一つであると考えられる。

これら3つの要素は、気遣い-気遣われる関係によって、形成される。気遣い-気遣われる関係の社会的なネットワークを広げていくことで、人々は、背景の意味・気遣い・時間性を機能させ、人生に意味を見出して暮らしていくことができる

本要旨は、『2024年度 静岡大学人文社会科学部 卒業論文要旨集』第21号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

ようになる。

第4章 人生の意味と物語

気遣い・気遣われる関係の中で、人が人生の意味を見出す上で重要なのが物語である。人生は長く、数えきれないほど多くの出来事があり、複雑である。それらのうちから出来事を選び出し、それぞれの出来事に何らかの役割を担わせながら、人生を一つの物語として理解することにより、そこに意味が見出されるのである。この理解は3章で示した背景の意味・気遣い・時間性とも密接に関わっている。例えば、人生から出来事を選び出すことは、気遣いが関わっていると考えられる。また、我々が構築する物語には背景の意味が大きな影響を与えていると思われる。さらに、物語における時間軸の繋がりについても、時間性に関わっている。

人生を物語的に理解することで「物語的価値」が現れる。物語的価値とは、様々な状況下で生きる人々の「生き様」がもつ価値を指す。全く同じ人生を歩む人がいないため、人生に含まれる価値はどれか一つのみということではなく、生き様には多様な種類の価値がある。こうした物語的な理解は、文学作品や映画、アニメなどの創作物の力を借りて、作り上げることができる。創作物は、さまざまな状況で生きる人々を知り、人々の人生に、気づいていなかった多様な物語的価値が含まれることに気づくことを手助けしてくれる。

第5章 人生の意味とアイロニー

ネーゲルは、第1章の議論の結論として、われわれは無意味な人生に、アイロニーをもって取りくめば良いと結論づける。というのも、アイロニーという構えをとることことで、自分の譲れない価値観に対して距離を保つことができ、自分の価値観を一旦留保したり、改訂したりする実践的アイデンティティの再編成を行うことができるからである。人生を物語的に理解するという方法においても、このアイロニカルな態度は重要である。物語的な価値を感じるものから逸れた出来事に遭遇しても、アイロニーを持っていれば、柔軟にストーリーを組み替えられるようになり、自身の人生を多面的に見ることが可能になるからだ。

ただ、「アイロニー」という特殊な態度が人生に核心的な意義を与えるというとは断定はできない。そこで重要になってくるのが、山口尚が示した態度だ。それは、人生の意味を超越的で語りえぬものとして捉え、そうした超越への信仰をもつというものである。超越的な何かへの信仰に導かれ一つずつ点を打ち、日々を積み重ねていくことで、何かしらの「意味」が形作られることとなる。この態度には、人生の意味を世界内部的な次元へ引き下してしまわないために、自らの理解を常に疑う、アイロニカルな構えが欠かせない。

人生を語りえぬものと捉えることと、人生を物語的に理解することは両立可能である。物語的な理解は、その時点での暫定的な語り過ぎない。その理解は、後に変更される可能

性もある。物語的な理解は、必ずしも、人生を完全に語ることを意味しない。常に人生を超越的で語りえないものとして捉え、アイロニカルな態度を持ち続けることは、我々を不安定な状況に置くことになりかねない。そこで、人生の意味を「語りえぬもの」として固定化するのではなく、その時の世界内部のストーリーに当てはめて、物語的理解と両立させることで、不安定な状況から脱することもできる。

「人生には何らかの意味があるのだ」と信じる姿勢を保ち、そして自分の物語をうまく組み替えながら作っていくことで、生じてくる問いと付き合いながら、うまく人生を歩んでいくことが可能になるのである。

おわりに

人間の本来的な在り方に即した物語的な理解を、アイロニーと信仰という態度をもって行い続ける。これが本稿で示した有意味な人生へ向かうための方法である。語りえぬものを語り尽くさず語ることで、我々は有意味な人生を志向し続けることが可能になるのだ。

ただし、本稿では、気遣い・気遣われう関係が現代社会において、本当に我々の基本的な在り方を支えるものとして根付いているのかという点について十分に論じることができなかった。また、物語的理解で参考にした鈴木は、正しい物語的理解とそうでない物語的理解という点について触れている。この考え方は、「正しい物語的理解をしないと人生の意味は見えてこない」という形で、有意味な人生を限定してしまう可能性もある。本稿の中心部分となっている物語的理解において、参考にしてきた鈴木がこのように考えている点については今後検討が必要だと思われる。

主な参考文献

- 伊集院利明『生の有意味生の哲学-第三の価値を追求する-』、晃洋書房、2021
- 榊原哲也「「生きる意味」を支えるもの-「自殺に傾く人」へのケアについての現象学的一考察-」、東京大学哲学研究室『論集』30号、2011、pp.34-47
- 鈴木生郎「人生の意味と物語」、『現代思想』、第52巻4号、2024、pp.38-49
- トマス・ネーゲル 著、永井均 訳「人生の無意味さ」、『コウモリであるとはどのようなことか』、勁草書房、1989、pp.17-39
- 山口尚『幸福と人生の意味の哲学 なぜ私たちは生きていかねばならないのか』、トランスビュー、2019